

稼宮先生評、是中堅雁舟の兩翼これを夾む

海邊春眺

浪のうへも道ある御代のはる風に眞帆かけいつる千船八千ふね

全評、一篇の太平頌に充つべし

花深迷路

思ひきや花よりはなにわけ入りてかすみの底の花を見んとは

全評、別有天地非人間

山家暮烟

やま人のかへる夕やまよふらん煙かくさふたにのかけはし

後撰百人一首評釋

(承前)

禾の舍あるじ

西園寺前太政大臣

住吉の松も我か身もふりにけりあはれとおもへ秋の夜の月

二葉の時より松のすじやうをまけるものは空ゆく月なるべければあはれとねもへといふはさるとなりわか身のふりゆくをまけるは知己にあり知己の世になくば月にうたへざるをえすまらず西園寺公知己なかりきや否やあはれに情ふかき歌之

勝部師綱

等閑に思ひしほどやつゝみけむうらみにあまる袖のなみたを
うらみにあまる袖の涙を、等閑に思ひしほどやつゝみけむ、今はつゝみもあへず、
涙こぼるゝとなりあまるの詞、つゝむの詞に映して、全篇過去の事をいひつらね
て、現在の事をうらみにあまる云々の詞の中にふくめたる、味ふへし、情の切なく
なりゆくさま、よくうつせり、

前參議爲秀

たちこむる霧のまがきの夕月夜うつれは、見ゆる露の下草

垣は物をへだつるもの、霧もへだつるものゆゑ、たとへて霧のまがきといふべき
りのたちこめて、眞垣のごと、へだてたる夕月夜にさへ、影うつれは、露の下草は、見
ゆるなり、たもいやりの心だにあらは、人の心は、すきく〜とみゆるものなり、聖人
の忠恕を貴び給ひしは、この心なり、詞幽にして旨深し、

小侍従

沖つ風ふけるの浦による波のよるとも見ぬす秋の夜の月

沖つのつは、助語なり、今の世に、沖の風といふと、同じと解するものあれど、さにあ
らずたゞさる心に見ゆるなり、ふけるの浦は、和泉の名所なり、名所のふけに風の
ふくをいひかけたり、波は白波なるへし、見ぬすと詞をさりて、秋の夜の月といへ
ば、下にすみわたたりて、白くみゆるかなといふ心を省き、ま格とみるへし、されども、

れのれにすれば、白波のよるともみぬ秋の夜の月といはまし、近頃秋山玉山翁の江月といふ題にて、かけるをみたり、その歌に村、芦、は、ほ、の、か、に、こ、ひ、て、白、波、の、よるともわかぬ、難波江の月とあり、この歌を、我はとる之、小侍従のには、はるかまされり、いづれも、皓月を詠じたるなり、因に云、玉山翁ハ、儒者なり、まかるに、その歌の妙なる、かくのとし、かな書も、いと風致ありて、唐流にてかゝれしものにもまざるべう覺ゆる、大儒の測るべからざると、かくのとし、

藤原範綱

すみよしの淺澤小野の忘水たえくならであふよしもかな
淺澤小野は、住吉にあり、忘れ水とは、木陰草陰などにありて、たえく、にみえて、たしかにありともみえぬやうの水をいふとぞ、逝水（水）といふとは、異なり、上の句は、たとへなり、忘れ水のことくわすれられて、絶えく、になるやうならずあふよしもかなと之、結の詞は、もがななとて、願の詞之、ありてがな、してがななと、皆同之、今の詞にも、うやうにして、もらいたいがな、といふは、これ之、これも戀の歌之、

平泰時朝臣

思ふには深き山路もなきものを心の外になに、尋ぬらん
世をのがれて、隠れんとおもふには、と心うべし、世には、色々の隠者あり、山隱市隱、吏隱などこれ之、修行のつきざる人は、山にかくるべし、心に隠るゝ處ある人は、市にても、更にても、よし、これを不隱于境而隱于心といふ、されども、修行をつみたる

上のことなり、輕々しく學ぶべきにあらず、これを口實にするものあり、おそるべし、にくむべし、この歌は、心隱をのべたるなり、されども、泰時その人にあらず、口に手をあつべし、

法眼行濟

戀ひしのふむかしの秋の月影を苔の袂のなみたにそみる

身ハ出家すども、心出家せざる時ハ、かやうのとも、あるべし、未練の歌なり、苔の袂は、出家乏たる人の衣をいふ、一首の意は、明也、

前大納言爲家

鐘の音は霞の底に明けやらて影はのかなる春の夜の月

この歌は、春夜の朦月を詠じたるなり、かねの音は、ふかくこめたる霞の底にきこゆれども、明のかねならず、まだ夜のふかきに影のはのかなる、春のねぼろ月夜のためもしろさよとなり、明方になれば、月の影も、ほのかに見ゆるものなり、今は、明やらで、ほのかにみゆ、ねぼろ月なればなり、月のねぼろなるは、かすこたてばなり、故らに上の句に霞をねきしなり、かねの音を明やらでにて抑へ、明やらでを、春の夜にて抑へ、かすこよりほのかを出たし、それより、あけを出したる、一罇の撃つべき所なま、爲家卿は、近古の大家にて、その家集を座右にねきて歌をならふべま、故人もいへり、

坂上明兼

吳竹のをれふす音のなかりせば夜ふかき雪をいふでしらまし

歌の意明かなり雪のしづくと風もなき夜にふる時はげにもかくのと云雪國
になれたる人ならではこの歌の味ばうすかるへし夜ふかき雪といふ一篇の見
どころと

二英遺音

天放生

予頃訪楠本天逸翁於肥前針尾嶋翁出示其門人故宮崎八郎及菅沼貞風詩各一
篇二子近時書生之英如翁跋所言儻令少年學子誦之亦足以激發其志氣矣因臆
寫寄諸龍南會雜誌云丙申歲穀雨前二日天放生識

述懷

肥後宮崎八郎

弱。之。肉。乃。強。之。食。龍。起。虎。伏。豈。有。極。先。者。制。人。後。者。制。亦。是。人。間。一。場。奕。一。自。白。人。起。洋。西。
奇。巧。動。奪。造。化。力。火。氣。走。船。電。通。信。橫。行。五。洲。恣。傲。逸。人。生。區。々。何。足。論。及。時。須。展。垂。天。翼。
轉。禍。爲。福。英。雄。事。仲。義。天。下。知。無。術。君。不。見。聯。邦。之。長。華。盛。頓。掃。除。殘。賊。布。至。德。又。不。見。魯。
西。之。帝。伯。德。羅。定。立。國。礎。關。棗。棘。苟。且。由。來。引。百。廢。事。有。機。宜。不。可。失。嗚。呼。何。時。皇。化。遍。遠。
邇。百。王。畢。而。四。海。一。

將赴呂宋賦示諸友

肥前菅沼貞風

北。極。之。南。南。極。北。地。勢。雄。濶。多。島。國。久。抱。遠。交。近。攻。謀。欲。向。何。處。展。我。力。太。閩。雄。圖。徒。勞。民。